慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シドニイ・ヱツブのソエト露西亜観
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.6 (1933. 6) ,p.783(1)- 802(20)
JaLC DOI	10.14991/001.19330601-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330601-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉先生の著書二つ

岩波文庫版

福澤撰集

定價六十錢　送料六錢

明治新文化の建設者として一世を指導し、政治經濟社會育英その他諸般革新の指針となられた先生の偉大なる業績については今更贅言を要しないであらう。先生は實に新日本の基石であつた。新らしき文化創造への歴史的存在であつた。先生を知らずして新日本の文化と發展とを語る事は出來ない。然るに先生の著作は目下浩瀚なる全集以外に單行本として世に行はれてゐるものは殆ど稀であり、然も近時先生の著書を要求するの聲は愈々高まりつつある。この時に當り本文庫は偉大なる先生の人と思想とを萬人に傳へむ事を誇らしき義務なりと信じ、先生の著作中特に有名にして重要なる諸篇を撰びこの一卷を成したものである。男女老若を問はず階級の如何なるを論ぜず苟も現代日本の文化に關心を有する人々の來つて本書を一讀せられ、大福澤の生ける思想と人格とに觸れむ事を希ふものである。

內容　福澤全集緒言　學問のすゝめ　帝室論　瘠我慢の説　明治十年丁丑公論　女大學評論　新女大學　時事論集＝福澤氏古錢分配の記　慶應義塾新年發會の記　故社員の一言今尙ほ精神　敎育の事一、二　ちんわんの説　壓制も亦た愉快なる哉　日本臣民の覺悟　私金義捐に就て

文明論之概略

定價四十錢　送料四錢

明治初年急激なる進步主義と頑冥なる保守主義と相確執して、社會の人心適歸するところを知らざる危機に當つて「文明論之概略」六卷は、文明とは何か、文明の標的は如何を、東西古今の事績を參照して詳細適切に論じ、以つて一世を指導せる一大警世策であり、一大文明批評であり、永遠に歷史的價値を失ふ事なき大著述である。西鄉南洲翁の如き常にこれを愛讀して少年子弟にもこれを勸めたといふ。先生の主義精神と其の平素の言行の基くところは此の一書によつてもほゞ窺ひ知る事が出來るであらう。「福澤撰集」と併讀せられむ事を切望する所以である。

東京・神田區一ツ橋通

岩波書店

振替東京二六二四〇

電話九段一八七(4)

三田學會雜誌　第二十七卷　第六號

シドニイ・エッブのソヸエト露西亞觀

小泉信三

シドニイ・エッブ夫妻は昨年の春夏に亘つて露西亞を訪問して其視察の結果を發表した。彼等の閱歷聲名は人をして此のソヸエト露西亞觀を特殊の注意を以て一讀せしめる。

エッブは言ふ迄もなく所謂フエビヤン社會主義の支柱である。フエビヤン協會の抱負に就いては、同志のバアナアド・ショオが嘗て、それは「サア・ロバアト・ピイルが自由貿易主義に改宗したやうに社會主義に改宗した總理大臣の爲めに其の政治的綱領を供すること」「普通英國紳士の爲めに、その社會主義者となることを猶ほその自由黨員となり、又は保守黨員となると同樣の日常茶飯事たらしめること」にあると言つたことがある。此抱負は確かに或程度まで實現された。フエビヤン協會が一八八四年に刊行したフエビヤン册子（Fabian Tracts）は號を重ねて一九

二三年に第二百號を出したが、一八九〇年から一九二二年までの間に於ける此冊子の發賣部數は二百七十七萬五千に上り、其中の初期のものは大部分其中に提議された改革案が既に實行されたといふ理由に由て不用に歸したと協會の一役員は誇つてゐる。二度内閣を組織した英吉利勞働黨の政策は最も多くフエビヤニズムに據つたものであつたのみならず、「普通英國紳士」の思想も過去三四十年の間に可なりフエビヤニズムの浸透を受けたことは爭はれない所である。エッブは其のフエビヤニズムの支柱である。

彼れは勿論集産主義、今日の言葉でいふ社會主義計畫經濟の主張者であるから、此點から見れば、彼れがソヸエト露西亞の施設に多くの點で滿足すべきことは當初から豫期し得らるゝ所である。併し他面に於て、彼等はコオルの所謂「漸次主義」（gradualism）の確信者であつて、社會主義社會の決して一朝にして實現し難く、たゞ幾多無數の社會政策的施設を進めて行くことが此目的に到達すべき唯一の途であるといふことを常に繰返して力說した。故に協會が甞て（一八九六年）發表した「フエビヤン政策の報告」の一節は、本協會はプロレタリヤと有産階級との闘爭に於て社會主義の全問題が唯一回の總選擧、議會に於けるたゞ一個の法律案に依て悉く決せられると言ふやうな瞬間の到來し得べきことを信じない。社會民主々義なるものは一個の年賦支拂金のやうに漸次に部分的に實現されるであらう。而して其の各部分は他の幾多の提案中の一たるに過ぎぬであらう。社會黨の任務は此等の案を提出し且つ其遂行に努めるに在る。世界史上に於ける劃紀元的危機に目を注いでゐるやうな凡ての社會主義者はフエビヤン協會以外の他の團體に加入せんことを希望する、と言つたのである。又此一派が從來度々の機會にマルクスの階級闘爭を排斥し又は嘲笑したことも知られてゐる。此方角から見れば、暴力革命と無産階級の獨裁に立脚する實践的ボルシエヸズムは無論フエビヤニズムと相容れない筈である。

併しソヸエト政府が成立してから十五年になる。一方に於て英國勞働黨によるフエビヤニズムの實践は今日一頓挫に會つた形がある。一九二四年と同二九年と二度の勞働黨内閣に、彼れは一度は商工大臣、一度は殖民大臣として參加したが、此内閣は集産主義實現の方向に向つては直接には何程の成績も示さずして終つた。此經驗はエッブの心境に何の變化をも齎さなかつたか否か。エッブ夫妻をして露西亞視察に赴かしめたものは、資本主義から社會主義への平和的推移の可能性に對する疑惑の念であつたとは、コオルの想像する所である。（G. D. H. Cole, The Webbs: Prophets of a New Order. "Current History." November 1932）。彼れはいふ「此等の疑惑は思ふにシドニイよりもビイトリス・エッブの心により夙く且つ深く侵蝕したものであらう。何となれば彼女の考へ方は一層慧敏且つ想像的であり、彼れのは一層秩序的且つ系統的であるから。加ふるに彼れは二度の勞働黨政府に在官し、日々の事務に心を奪はれた一方に、彼女は外部にあつて、何が起りつゝあるかを一層明白に見ることが出來た。露西亞に往きたいと思ふ念慮を抑へ難く感じたのは、彼れよりも寧ろ彼女であつたが、一方露西亞人が今實行しつゝある國民的計畫の考案の眞の先祖は彼女よりも寧ろ彼れであつたと私は思ふ」と（pp. 145-6）。固よりコオルの想像に過ぎないが、彼等の露西亞視察記を看る者に多少の參考となるであらう。

エッブのソヸエト露西亞觀は、私の見たのは亞米利加の Current History と英吉利の The Political Quarterly とに連載されたものである。前者に連載されたのは左記の六論文で昨年十一月號に始まつて今年四月號に終つてゐる。

1) Business Life in Soviet Russia. 2) The Worker in Soviet Russia. 3) Freedom under Soviet Rule. 4) Is Soviet Russia Democracy ? 5) The Printed Word in Soviet Russia. 6) The Family in Soviet Russia.

The Political Quarterly 所載のものは共產黨の事を書いた The Steel Frame of Soviet Society (Vol. IV. No.1) と、ソヸエト聯邦の政治組織、其に於ける集權と分權の實際を說いた Soviet Russia as a Federal State (Vol. IV. No. 2) である。

此等諸篇を通讀すると、エッブがソヸエト露西亞に同情を持ち、其の制度施設を餘程滿足して紹介してゐることが明である。諸論文の中でも The Political Quarterly の方に寄稿したものは、割合に分析的批判的であるが、Current History 所載のものは、ソヸエト露西亞を知らないで、之に對する先入主に煩はされてゐる一般多數の亞米利加人に向つて、計畫經濟の何物たるかを敎へることを主眼としたものか、努めて其長所を揭げ、或は勞農當局者の言說を其儘取次いでゐると見受けられる個處もある。ソヸエト露西亞に於ては他の諸國とは違つて生產が利潤獲得の爲めに行はれないで、國民に最良品質の最大量生產物を供給する目的を以て行はれ、而かもそれが地主の氣紛れや資本家の打算に依て行はれないで、愼重なる計畫に從つて行はれるといひ、英、米、獨諸國で全人口の約四分一が賃銀を得ることが出來ずにゐる時に露西亞では大衆的失業がないといひ、(「ソヸエト露西亞に於ける產業生活」)普通勞働者は一九三二年には一九一四年よりも實質的に有福であり、食物、衣服、靴、住宅を以て測つた其生活標準は確實に上進しつゝあるといひ、(「ソヸエト露西亞に於ける勞働者」)計畫經濟は個人の欲望行動等に對する廣き、不斷の干涉を伴ふけれども、これは即ち全民衆の自由を進める所以であつて、人が是を自由の增進と見るか否かは、恐らく彼れが有產者が自由に其氣紛れを恣にすることと、全員の五分四に當る無產者が其撰擇及び創意の機會を廣めらるゝことと世界に取つて其の何れを重要視するかに由て定まるであらうと言ひ、(「ソヸエト支配の下に於ける自由」)「ソヸエト露西亞はデモクラシイなりや」)又革命が一時家族生活の不安定と男女關係の放逸とを來たしたことは事實であるが、他面賣春の罪惡は殆ど悉無となると同時に最近數年間に於ては家族生活の堅實を重んずる傾向が强くなりつゝあるといふ(「ソヸエト露西亞に於ける家族」)如きは其の二三の例である。

此種の觀察は珍しくない。併し吾々はエッブの社會問題研究者としての半世紀に亘る經驗と其研究の產物を承知してゐるから特別の注意を以て彼れの觀察談に耳を傾けたくなるのである。

吾々が第一に知りたいのは、矢張りソヸエト計畫經濟の將來に就いてエッブが果して如何なる觀察を下してゐるかといふことである。彼れは固より計畫經濟の主張者であるから原則上始めから好意を以て之に臨むことは分つてゐるが、其實踐上の成績に就いて彼れが果して豫想した通りの成績を見出したか、或は期待に反する事物に逢着したか、其細目に就いて聽いて見たいのである。併し今迄のところでは彼れは未だ大體の原則以上に細かに其實踐上

の長短を指摘してゐないのは遺憾である。彼れはソヸエト經濟組織の特色は不勞所得を廢したことにあると言つてゐる。「諸國民の間にあつて獨りソヸエト露西亞が採用した經濟組織上の肝要なる新奇の點は、産業の一方の端から他の端に至る迄、一人の利潤獲得者の出しやばる者なく、一人の利子坐食者の土地及び資本の使用許可に對して貢納を課する者もないといふことである。如何なる等級に於ても、亦た如何なる資格に於ても、積極的に産業に協力する者は、皆な其勤勞に對して、彼等と結ばれたる樣々の約定に從つて賃銀又は俸給を以て支拂はれる……」。それと同時に生産は利潤獲得の手段として行はれないで、國民の生活を豐かにする爲めに行はれる。「ソヸエト産業の目的は決して所有者の爲めの金錢利得ではなくて、常に國民に供給するに最良質の能ふ限り最大の産額を以てすることにある。これが産業上に於てソヸエト露西亞と爾餘の世界との間の第一の大なる差異である。第二の差異は、生産及び分配が地主の氣分氣紛れや、又何十萬人の別々の資本家、又は其支配人或は銀行家の利潤の見込みに就いての打算や、否な一萬人の國家の公任工場經營者の決定にも委せられず、特定の市民や市民の部分の爲めでなく、現在及び將來の全社會に取つて何が最良であるかに就いての入念なる全國民的計畫の主題とされてゐることである」(Nov. p. 149)。エッブは玆でゴスプランの組織職分活動に就いて述べてゐるが、計畫經濟の實蹟に就いて餘り立ち入つた評論は試みてゐない。勿論彼れもソヸエト計畫經濟の缺陷違算を看過する者ではない。「幾年の不斷の進歩の後に於てすら一般計畫は明かに不完全である。各年は無數の誤謬を暴露する。ソヸエト露西亞では實行は常に設計に及ばない。能率缺乏は慢性的で風土病的である。」併し此等の缺點あるにも拘らず、エッブは此成績も猶ほ無計畫の成績に優ると謂ふのである。「而かも猶ほ如何なる批評家も、此等の條件が與へられたとして、計畫がなかつたら生産がもつと多かつたらうと眞面目に提議するものはあるまい。」彼れはまた利潤獲得の見込と自由競爭とが人の經濟的努力に對する有效な刺戟となることを否認しない。併し營利者の目的は營利にあつて、社會に對する奉仕の增進又は改善ではないのであるから、彼等の營利努力が社會に有益であるのは其偶然附隨の結果に過ぎない。彼等は生産額を增すことに努力すると同樣の熱心を以て其競爭者から仕事を取ることに努力するであらうし、又其生産物を廉い價格で消費者に供給するよりも、價格を維持し、或は之を引上げることに依て其利潤を增すことに遙に熱心であらう、と謂ひ、ソヸエト露西亞の商工業制度を以て優れりとする口吻を漏らしてゐる。

エッブが特に指摘するのは、ソヸエト露西亞で、多大の貯蓄と新事業の建設との行はれつゝあることである。從來動もすれば、重要なる此の二の事は利潤の刺戟なしでは行はれ得ないものゝやうに說かれてゐたが、露西亞に於ける事實は如何といふに、ソヸエト露西亞は將來の消費者が確かにより高き生活標準の利益を收め得んが爲めに、「少くも其勞働者が生産しつゝあるものゝ四分一」を年々現世代の消費者の消費から他に振り向けつゝある。「全世界の歷史に於て如何なる國に於ても、私的利潤なき此社會の最近五個年間に於けるほどの大なる部分が國民の總所得から『貯蓄』せられて資本財に『放資』せられたことは未だ曾てない」とエッブは謂つてゐる。然らば新企業の建設であるが、その盛んなることも類例がない。「企業、敢爲及び冒險が問題となれば、ソヸエト露西亞は向不見であるかも知れぬ。否な資本家の目には些か狂的であるかも知れぬ。併し失敗と損失の大なる危險を冒しての企業と敢爲とに

就いては、それは大膽不敵に於て類例なきものである」。而かもそれが凡て利潤の刺戟なくして行はれたのである。「貯蓄の爲めにも企業の爲めにも私的利潤を缺く可からずとすることが謬りであるとの證明は決定的である。」

ソヸエト露西亞と爾餘の諸國との間に於ける恐らく最も重要の差異としてエッブが指示するのは今日の露西亞に大衆現象としての失業がないと謂はれてゐることである。其原因は如何に在るかと言へば、共產主義者によれば、それは生產が消費者に依て統御せられてゐることに在る。「生產及び分配の全指導と統御とを擧げて生產者としての生產者（資本家たると勞働組合員たるとを問はず）ではなく、消費者の社會（政府又は協同組合としての）の代表者に托することに依てソヸエト制度は殆ど不知不識の間に全世界が索めつゝある經濟的秘密を發見した。獨り消費者――消費者として營利者にあらざる――による產業の指導のみが無限の生產增加と價格の引下げへの妨げなき專心を保證する。此の消費者（消費者としては投機又は金融に利害關係を持たぬ）による管理のみが、競爭的產業の暴騰と暴落との交代から脫出することを可能ならしめる。生產と分配の一切が消費者の代表者に依て企てらるゝ處に於てのみ能く勞働者――其標準は勞働組合に依て擁護せらるゝ――の全體は、如何なる勞働組合も輕減すること能はざる定時的大量失業に對して保全されるのである。」何うして其が行はれるかといへば、それは消費者が生產の統御に當るところでは、生產力の增進と消費の增進とが相伴ふからである。「自然に對する支配の不變の增進と、機械の絕えざる發達と共に一人當りの產額は不斷に上進する。而してこれが凡て賃銀に分割せらるゝから、貨物や勤勞に對する有効需要は必然的に之と步を共にする。」これは共產主義者の主張を紹介したものであるが、エッブ自身此見解の贊同に傾いてゐることは前後の語氣に依て察せられる（Nov.p. 153-154）。

右の如き觀察見解は從來も度々紹介せられたものであつて、特に新奇と稱すべき所はない。多年の研究に由て產業組織の理論に精通してゐる筈のエッブからは、更に進んだ批評を聽きたかつたのであるが、上記の論文では未だ其處まで議論が進んでゐないのは遺憾である。

旣記の通りエッブはソヸエト計畫經濟を辯護して、よし如何なる缺點があらうとも、何人も「計畫がなかつたら生產がもつと多かつたらう」と言ふものはあるまいと言つてゐる。一應尤もである。併し是に對しては、反對の側から別の批評も下され得ることを注意しなければならぬ。それは若しも革命と共に次ぐ無產階級の獨裁が行はれなかつたなら、革命後の數年又は十數年間に於ける甚しい生產荒廢は起らなかつたであらうと言ふ事である。統計數字は區々に出て必しも一致しないが、例へばグリンコの「ソヸエト聯邦五個年計畫」に從へば、工業生產額は一九二〇年には戰前、即ち一九一三年の二〇・四％に陷落し、農業生產額も一九二一―二二年には、戰前の五四・四％に低下し、漸く一九二五―二六年又は一九二六―二七年に至つて始めて戰前の狀態に復歸して居る。一九二八年五個年計畫着手後の生產力增進は確かに急速であるが、革命、內亂による荒廢を差引けば純利益は必しも大きくない。況や生產力增進の爲めに露西亞民衆の拂つた犧牲を計算するに於てをや。假りに革命が起らなかつたものとし、國內に平和が維持せられ、ストルイピンの農業改革は着々と進行し、歐米諸國との貿易は順調に行はれ、資本は自由に此等

の國々から輸入せられたものとしたならば、露西亞の經濟的發達も必ず侮るべからざるものがあつたに相違ない。無論此發達は、共産主義者から見れば、到底滿足し難い種類のものであつたらうが、單に生産力の增進といふ見地から見られば、而かも比較的に犠牲少なき生産增進といふ點から見れば、一概に計畫經濟の成績に劣るものとは斷定し難いであらう。

エッブは又前記の如く、ソヸエト社會では、生産に對する有効需要は生産力の增進と歩を共にして增進するといふ說を引いてゐる。併し生産力の增進が生産物に對する有効需要と相伴ふといふことは、資本主義社會に就いても言はれてる。生産物の價格は生産に參加した者の所得を以て合成せらるゝ以上、生産物の價格は、全體としては、之を買ひ取るべき所得と共に增進しなければならぬ筈である。これは生産參加者の所得が勞働所得のみから成るか、勞働所得と財産所得とを以て成るか、の如何に由て異なる筈はない。たゞ生産物が所得を以て買取られないといふ場合は、所得の特定の用途と特定生産部門の生産物とが合致しない爲めに起る。そこで問題は、如何にして生産物の種類數量を、其に對する需要に合致せしむべきか。利潤の贏得を目的とする企業家と國家機關又は消費組合とその何れが一層よく此任務を果たし得べきかといふことである。

生産が消費者の統御を受ける云々といふけれども、苟も生産にして消費者の統御を受けずに行はれるといふ場合はない。生産は常に消費者を滿足せしむる爲めに行はれ、從つて何等かの統御を消費者から受けなければならないのである。たゞ所謂資本主義國では、企業家が消費者に代つて生産を統御し、（企業家は決して消費者の友ではないかも知れぬ。併し彼れは自己の利益に忠實なる限り、生産當務者に對しては忠實なる消費者利害の代表者として之に臨むのである）社會主義國では國家機關がそれを行ふといふ丈けの差違があるに過ぎない。然るに此兩者は、夫々如何にして生産を統御するかといへば、企業家はいふ迄もなく生産物の市場價格と生産手段の市場價格とを比較してその生産すべきものゝ種類品質數量を決定するが、國家機關は如何にして之を行ふか。ソヸエト制度は今後原則として市場を保存し、生産物の需給に應じて其市場價格を騰落せしめ、是に由て其生産の方向を定める積りであるか。或は原則として之に據らない方針であるか。若しも市場價格に據らないとすれば、一の生産物が消費者の痛切に要する所であるか否かを何物に由て判斷するか。生産方針の決定は全く手搜り若しくは手當り放題となり、國家自ら各個人の家計豫算を規定する所まで立ち入るにあらざる限り、生産の種類數量が消費者の要求に適ふといふことは保障されなくなるであらう。

以上消費財たる生産物に就いて言つたことは、消費財を造るべき生産財、更に其生産財を造るべき生産財の生産に就いても適用される。例へば鐵や石炭や木石材等が、水や空氣の如く有り餘つてゐるなら問題はないが、さうでないとすれば、此の不足せるものを如何なる種類の生産に、如何なる程度に充用せしむべきか。此場合若し此等のものに市場價格を成立せしむるならば、問題は簡單である。價格は比較的薄弱なる需要者を排斥して需要と供給とを宛も合致せしむる程度に定まるであらう。又此等の生産財其者を如何なる割合に於て生産すべきかをも、同様に其市場價格に由て決定すれば、——即ち其生産費に比して市場價格の高いものから先づ生産することにすれば——

簡單である。併し消費財並に生產財に就いて市場價格の成立することを許し、其騰落のまに〳〵生產の方向種類數量を決定することにすれば、其は市場經濟であつて、最早計畫經濟ではない。故にヱッブの紹介するやうに、生產業を消費者の代表者の統御下に置くといふことは固より至當の事であるが、如何にして實際に其を行ふべきかに就いては、多くの問題がある。老練なるヱッブに其點まで進んで論じて貰ひたかつたのである。

今日ソヸエト計畫經濟の成績を批評するものは、必ず其處に生產の比例性が保障せられてゐないこと、生產物の品質の低下せることゝを指摘するやうである。今日の所謂資本主義經濟では、比例的生產は市場機構に依て保障され、不足せるものは騰貴し、有り餘るものは下落することに依て生產の擴張又は縮小が促されることになつてゐる。勿論此の市場機構の作用は、決して完全なるものとは謂ひ難く、其處に無數の缺點があることは今更言ふ迄もないことであるが、兎に角市場價格の高低といふことに依て、生產諸部門が互に無關係に生產を增減するといふことは制御されてゐる。方今ソヸエト露西亞に於て生產比例性の缺如が頻りに指摘されるのは、第一には市場の廢止、若しくは市場機構の痲痺によるものと見なければならぬ。即ち特定生產物の欠乏又は過剩が直ちに市場價格の高低に現れず、又生產當事者が直ちに此の價格の高低に從つて生產を伸縮するといふ事が行はれない爲めに、全體としての生產量は增大しても、生產物相互の間に比例が失はれ、極端にいへば、紡績工場は設立されても機械がないとか、原綿が供給されぬとか、或種の生產は增加しても運輸機關が缺乏せる爲め生產物は其需要者の手に到達しないで、空しく其原產地に堆積してゐるとかいふ類の事實が起るのである。これは果して經濟計畫當事者が未だ無經驗であり、計畫並に計畫遂行の機關がまだ不備である爲めに起るのであるか、或は市場價格の作用を排除する計畫經濟其者に必然避け難き缺陷であるか。此點は更に周密なる考察を要するであらう。即ちソヸエト制度は消費者の代表者をして生產を統御せしめると言ふものゝ、市場機構の廢止は却て此統御を薄弱ならしめる結果もあることを考へなければならないのである。

生產物品質の低下も亦たこれと同じく消費者の統御の薄弱を示すものである。五個年計畫遂行に於て第一には生產物數量の增加が重要視されてゐる。固より生產物品質の精良も決して看過されてゐる譯ではないが、品質の吟味は數量の監督よりも遙に困難であるから、自然有効に行はれない。其結果が往々甚しい品質低下となつて批評を受けてゐるのである。勿論品質維持の方は、これは生產の比例性とは異なり、計畫經濟から必然的に除き難い缺陷ではない。若し品質の檢査を嚴密周到にすれば其水準を高めることは決して不可能ではないのである。併し此場合にも市場に於ける自由賣買を許し、購買者をして自ら自己の購買する商品の品質を吟味せしめ、不良のものを避けて良好のものを撰擇せしめたならば、陶汰は遙に簡便迅速に行はれるであらう。國家機關が生產物の品質を監督することの困難なることに就いては、一九三一年四月一日から實施せられ、一年許りして廢止せられた「自動的信用」の經驗の如きは吾人の參考となる所が多い。

五個年計畫實施後、勞農當局は國營企業相互間に個別的に信用を授受し、手形を振り出すことを禁じ、國立銀行

をして代つて一切の支拂に當らしめることにした。即ちこれに由て貨物購入者と提供者との直接の聯絡を全く廢除し、或企業から他の企業へ何々貨物の幾何量を交附するといふことは、當事者が自ら直接に之を定めず、上方の中央機關で之を約定し、下方の企業はたゞその指定通りに品物を交附することとなし、交附者は其送狀を銀行に差出せば、銀行は其代金に相當するものを一方から他方の勘定へ振替へることにしたのである。斯くして獨り國立銀行に信用授受を獨占せしむるのみならず、之を通じて銀行に五個年計畫の遂行を監理せしめる積りであつた。然るに銀行は融通を嚴密にすれば生産物の流通從つて其生産を阻害する。そこで信用授與を寬大にして監理の方を閑却するの已むなきに至つた。それから始まつたのが所謂自動的信用であつて是に依てソギエト經濟の規律は失はれることになつた。即ち品物の供給者は銀行から支拂を受ける、然るに銀行自身は該貨物の購買者でないから、提供せられた品物が果してよく購入者の要求に適合するか否かは左程注意しない。即ち提供者の方から見れば、其品質を吟味せらるゝことなしに生産物を引取つて貰へるといふ結果となる。即ち一方で役に立たぬもの、少くも充分役に立たぬものが提供せられ、之に對して代價が第三者たる銀行に依て支拂はれるといふのであるから、貨物と通貨量との關係は忽ち攪亂せられざるを得ない。即ちインフレエションである。而して此弊害の爲めに「自動的信用」は間もなく廢止せられ、國營企業は相互の間に提供せらるべき物品の數量品質價格其他の條件を明細に記載して生産物供給の契約を結び、銀行は單に物品が供給されたといふ丈でなく、それがアクセプトせらるゝ事を俟つて始めて支拂をすることに改められた。是は一例に過ぎないが、生産物の品質は其購買者自身に依て最もよく、有効に吟味監督せらるゝ消息を說明するものと見て好からう。

此等の事實はエッブの目に果して如何に映じたであらうか。是に就いての詳論を聽くことが出來ないのは物足らず思はれる。又國營企業の利潤は其如何なる割合が國家の手に歸し、如何なる割合が其企業に與へられるか。此割合は度々變更されて來たやうであるが、其の現在の割合と、之の企業當局者の努力に及ぼす影響とに就いてのエッブの所見を聽いて見たいと思ふ。國營企業の利潤は曩に一度び其の大部分を擧げて國庫に納附することゝ定められたが、其後に至つて改められて、其約一半は各企業の手に委せられ、各企業は之を資本建設、運轉資金の增加、又從業者の文化的欲望の爲めに利用して差支ないことにせられたといふ事である。これは無論此報酬に依て從業者の勤勉を刺戟する目的で改められたのである。

各企業の利潤のみならず、從業勞働者は何の刺戟に依て其勞働を促されるか。是に對して共産主義者側から屢々唱へられるのは、ソギエト露西亞には最早搾取者が存せず、勞働の結果は皆な勞働者に歸するといふことが勞働に對する何よりも强い刺戟になるといふ說明である。エッブも此說明を是認してゐるやうに見える。固より此主張に或眞實の含まれてゐることは事實であるが、併し個々の勞働者が、其の己れの勞働の結果が他人たる搾取者には歸せず、皆な勞働者全體の利益となるといふ確信に滿足して、たゞ其丈けで勤勉に勞働すると見ることは樂觀に失する。現にエッブ自身紹介してゐる通り（Dec. p. 279）今日露西亞で出來高拂賃銀制が採用せられ、又賃銀率に等級を別つことが行はれてゐることは、勞働者が其の勤勞に對して其に相應する個別的報酬を要求し、又此を與へること

とが其努力を奬勵する所以なることを承認するものに外ならぬ。ソヸヱト經濟に於ても個別的報酬に依らずして人を勞働せしむることは存外困難であらう。現在のところは五個年計畫遂行の理想主義が異常な感奮の泉源となつて、姑らく人をして幾分物質的報酬の多寡を閑却せしめてゐるが、これが永續するものと見ることは恐らくは失當であらう。

併しヱッブと雖もソヸヱト露西亞に有利の評言のみは下してゐない。殊に英國人たるヱッブに容赦し難く見えたのは、例へば彼の「クラアクの清算」として、何等の罪なき農民に加へられたる如き種類の政府の斷壓である(Jan, p. 405)。併し其よりも重大なる不平の種となるものは、所謂反革命的言論著作に對する政府の過酷なる抑壓である。ヱッブは固より此抑壓に就いては一々風說の儘を信ずるものではないが、而かも猶ほ彈壓の確かに行はれてゐる事實を否認し難く、旅行者は、ソヸヱトに不利なる成心を抱く者にあらずとも、「行政の細目に對する公然の批評は他の何れの國に於けるよりも豐富で無拘束であるが、人々は共產黨政治に對する根本的反對、又は其の萬一の失敗に對する懸念、又は議會主義又は營利制度を優れりとする意見は、內所にでも之を表明することを怖れてゐる。」思想家や著作家は此に對する不平を鳴らさないけれども、「彼等が獨り其表現のみならず、遂に重大なることであるが、其思想の拘束を感じてゐることは、往來交際の間に明白となる」と言つてゐる(Jan, p. 405)。

此事實に對しては、西歐羅巴人たるヱッブは之を默過することが出來ない。思想言論の自由の抑壓は、やがて其會社の重大なる損失となる。西洋世界は斯る抑壓が「啻に人間幸福を縮小するのみならず、又結局に於いては社會其者に取つて重大なる損失であることを信ずるに至つた。思想家が自由にその好む通りに思索し得るにあらずんば、彼等は斯る主題に就いて全然有効に思索することが出來ぬ。」「其政府の權威を保持しても、其自身の靈を失つたならば、それは一國民に取つて何の利益があらう。」(p. 406) と言つてゐるのは、自由主義に養はれたヱッブとして當然の事であらう。

所謂クラアクの「清算」に就いてヱッブは、或一階級全體の人々の行爲が社會に取つて重大なる害をなす場合に於ては、社會には之を制壓する權利と義務とがあるが、併し英國で其が行はれる場合には必ず左記の用意が行はれると言つてゐる。

（一）布令の施行は之を地方町村の混沌たる「民衆正義」に委せず、一々上級裁判權に依る審問の後、明白なる裁可を俟つて始めて行はれるであらう。

（二）右の處置が個人的に不當を犯せる者のみに限らるゝことを保障するやう、「清算」せらるべき人には必ず有効なる控訴の機會が與へらるゝであらう。

（三）公判廷に於ける裁判と判決となしには如何なる徒刑追放又は其他の刑罰も課せられぬであらう。

（四）他の職業に就くこと能はざる者に對しては、少くも同情ある酌量がなされるであらう。

英國人は其人道的感情又は其のフエア・プレイの確信に由つて之をなすと思ふであらう。併し潛在意識的には公

正に、親切に行動せぬことは、一個人に於けると同じく一社會に取つても結局引き合はぬことを承知してゐるからである（p. 406）といふのは蓋し英國人の常識の一様に贊同する所であらう。

ヱッブが露西亞で最も奇異且つ驚異の感を以て觀察したのは、共產黨の組織作用及び實力であらう。彼れは此を「ソヸヱト社會の鋼鐵の骨組(steel frame)」と稱し百五十萬人の共產黨員が露西國內到る處の工場、農場、鐵道、軍隊、軍艦、組合等の內部に組織する總數五萬の細胞を、此の鋼鐵の骨組を締める鋲釘に喩へてゐる（Political Quarterly vol. IV, No. 1）。共產黨は普通の意味での政黨とは異なり、嚴選せられ、故らに制限せられたる特殊の精英人物の結社である。黨員は黨の豫備訓練組織である共黨主義青年同盟（Comsomol）員の中から選拔される。コムソモルでは、十七才から二十五才までの青年が此で勤務し、且つ訓練を受けるのである。コムソモルの下には更にピオニイルがあつて、これは十乃至十七才の少年少女を以て組織せられ、更にピオニイルの下には十月革命を記念して Octobrist と呼ばれる小兒の組織があつて、八乃至十歳のものが此に屬する。共產黨は普通の政黨とは異つて、決して黨員の多きを希はず、入黨者を嚴選するのみならず、時々「清黨」といふことをして望ましからぬ黨員を陶汰する。陶汰の理由となるものは、政治的異端、規律背反もあるが、其大多數は節制、正直、品行の點に關する失行である。其故共產黨とは如何なるものかといへば、共產黨員自身は强く宗教を排斥するけれども、ヱッブは之を正しく加特力教會の教團、例へば十七八世紀に於けるフランシス、又はドミニクス教團、殊に十八九世紀のジヱスイトに比すべきもの、或はもつと新しい例を引けば、特に選拔せられ訓練せられ、且つ規律を課せらるゝ救世軍の將校團に相當するものだと謂つてゐる(pp. 9-10)。而して此の共產黨員が現在のソヸヱト露西亞の事實上の支配階級を成してゐるのである(p. 11)。

斯る特殊の結社の單獨支配は如何なる成績を示したかといふに、ヱッブは少なくもソヸヱト露西亞は一の意志を持ち計畫を持つてゐることを認めてゐる。近世デモクラシイの病弊は、其の意志なきこと"will-lessness"である(p. 13)。ソヸヱト制度の缺點短所は種々あるにしても、其は困難に打ち克つことに於て驚くべき成功を示した。英國又は米國の政治機關、或は政治學に知らるゝ他の何れかの政治機關が、過去十年間に於て共產黨よりも更によく露西亞の役に立つたであらうと信ずるものがあるとすれば、それは餘程大膽な人でなければならぬ。たゞ共產黨は意志と計畫とを持つてゐるといふが、其意志及び計畫は民衆自身のものであるか、或は彼等に押し着けられたものであるかといふことが問題である。ヱッブも、一億六千萬人の民衆は、一九一八―二〇年の時代に於ては、生きる爲めに足搔く本能以外何等の總意を持たず、又之を成就する計畫と稱すべきものも持たず、意志と計畫はたゞレニンに在つたことを承認してゐるが、併し此の意志と計畫とに、露西亞人民の大衆が甘んじ服してゐることは疑ふことが出來ないと謂つてゐる。今日露西亞では盛んに所謂「自己批判」が行はれてゐるが、然らば果して共產黨の支配を廢して、地主主義及び營利的資本主義の再建以外之に代るべきものがあるかといへば、何人も概念を持つてゐない。而して、此の代案に對しては、獨り都市プロレタリヤの殆ど全部のみならず、農民の大衆も亦た猛然として

之に反對するであらうといふ。

上述する所に由て見らるゝ如く、ヱッブがデモクラシイの「無意志性」に失望してゐることは明白である。共產黨の單獨支配は、此點に就いて明かに長所を持つてゐる。縱令その長短に就いて議論あるを免れないとしても、現在の露西亞に於ては、此に優る代案とすべきものがない。ヱッブは大體此樣に考へてゐるものと解せられる。併し是は事情の異なる露西亞の事である。英、米其他デモクラシイの行はれる西洋諸國に就いてはソヸエト露西亞の經驗は果して何を敎へるものであらうか。共產黨は確かに意志と計畫とを有するだらうが、西歐諸國民が幾百年の間に漸く獲得した公民の自由は、勿論ヱッブと雖も輕々に之を放棄しようと言ふものではない。彼れは西歐デモクラシイに失望しながらも、少なくも未だ英國人に取つてソヸエト制度の採用を薦めることは敢てしない。畢竟彼れは現在のところ、ソヸエト露西亞に好意ある視察者として、ソヸエト制度及び共產黨の單獨支配が、不文晚開の露西亞人に取つては誠に已むを得ざる必要物なることを認める程度以上には進み出で得ないものと觀察されるのである。

最近景氣觀測に現はれたる理論と統計の折衷的傾向に就て

小　高　泰　雄

從來景氣硏究所設備の發展した諸國に於いて一般に採用せられてゐた景氣觀測の方法は主として、統計的硏究を主とした機械的方法であつた。然るに斯る方法は資本主義社會の基本的機構の動搖より生じ來つた景氣樣相の變動の爲めに孰れも其の科學的性質を再吟味せられ、その結果從來の統計的機械的方法に代つて、新に理論的方法を加味した統計的方法が漸次に採用せられる傾向を示すに至つた。かゝる傾向は獨・佛・米に既に生じ來つてゐるのであるが、玆では、從來の數學的方法の本家である米國に於ける新方法の發展に就いて主として記述し檢討した。勿論玆に述べられてゐる方法は機械的方法への反動として生じ來つた新なる統計と理論との折衷的方法ではあるが、それは後述するやうに、全く、統計的方法を擁護し、これを修正する爲めの努力に外ならないのである。謂ふ迄もなく、かゝる統計的觀測法に對して、一定の資本主義發展理論からして景氣豫測を理論的に考察し、統計はそれの單なる補足手段となしてゐる純理論的方法は觀測論上一の重要なる分野を占めてはゐるけれども、かゝる方法の檢討はこれを他の機會に讓つて玆では前述の樣に統計的方法のみに問題を極限した。

一

「大戰以來景氣は上昇下降したが、併し、それは異る國々に於いて同時的に發生しないか或は僅に部分的にのみ